



## データ／情報音痴

DBA（DataBase Administrator）は、今でも存在し、職務者として期待される専門職として認知認識されているのだろうか。DA（Data Administrator）については、どうだろう。

日本語として前者は、データベース管理者と言ひ、後者は、データ管理者と言われる。似通った名称だが、職務職責から意味は違う。

以前にも触れたことがあるが、システム部、情報システム部という部門名でも言える。情報は、ここではデータの意味に使われるが、いずれにしても、情報、データの使い方の妙に関連している。

このへんの曖昧さの一番の原因について、筆者は、情報、データの立ち位置が、不明瞭だからだと思っている。

情報について、いろいろな表現がある。実態は、その都度、適当に使われ、その都度、意味不明になって、使われなくなる。

生ずるのも、消えるのも、特別な意味はなく、流行のように生じたり、そして消えたりする。だから、言われて、聞かれて、ああ、となるか、何それ、となる。

よほど気にしたとしても、その程度である。

流行語ならそれでもいいが、企業の基本となる情報について、これでは組織上具合が悪いし、情報管理がうまくいかない大きな理由になる。情報、データは、一部の人の間で話題になって、それでもいいというテーマのものではない。

情報管理については、それを担当の仕事としていながらも、前述したような状態だからだろうが、社内のシステム部長から、外部情報と筆者の言う情報は、自分の守備範囲ではないと言われたことがある。

実に驚いた。しかし、返す言葉もなかった。それでは困るだろうと思いつつも、何も言い返せなかった。ただただ、呆気にとられた次第である。

## 基本見識の欠落

DBA については、その意味するところも知らず解らず、世間一般、周りの皆が言うから使っているだけという傾向も、実は無きにしもあらず。

もちろん、DA についてもである。

### 閑話休題

ついでに言うておおくが、実は、情報という言葉についてもそうである。その意味合いもよく考えもしないで、分かったふうに使っていることが多い。

情報システム部といった具合に、専門の組織名として安直(?)に使われている。しかし、少なくとも情報を扱う専門部所だという認識/意識が、果たしてあるのだろうかと思いたくなる部門長および部門員の言動が目につく。

話を戻す。改めて言うておおくが、DBA と DA とは、役割が根本的に違ふ。当初はかなり厳密かつ正確に認識され、把握されていた。だがその違い、意味合い、そして職性/職責が、いつ頃まで正しく認識されていたのかとなると、はなはだ疑わしい。

今日でも、DBA、DA という呼称が使われているとするならば、筆者の杞憂であつて欲しいと願うばかりである。

システム部、情報システム部という呼称/部門名も、変遷であり、流行である。決して、その必要性からではない。実に、組織名が一年と続かないケースはある。右向いて左を向いたら変わつてゐる。そんな感じにしても、あるものはある。

部門名は、一部門の問題ではない。実際、「情報」という冠が部門名に付いたり取れたりしたことが、一時、目に余る形であつた。

悩んだ結果かもしれないし、迷いの結果かもしれない。その結果の果てとすれば、收拾がつかない企業内の実状を反映していた証左である。情報という言葉の立ち位置および定義が曖昧だったからだ。実に、みっともない話である。それが今日にも引きずられているとしたら、悲しくも哀れなことである。

## 音痴の極み

一口で言えば、要するにデータ音痴、情報音痴の極みである。情報処理の入口、スタート地点で間違いを起こしている。コンピュータ導入ブームに乗つてコンピュータ導入を進め、世界的にも先駆的だとされてきた我国だが、とんだお粗末ぶりである。

同じように我国の大企業が犯している情報処理に対する基本的間違いの事例に、システム部門の外部組織化がある。

目先のコスト計算だけで、企業の組織外にシステム部門を出すという動静である。

情報処理は外部の子会社でも十分だという発想である。とんでもない話である。

繰り返すが、これこそ我国の大企業の多くにおけるデータ音痴、情報音痴を示す極みである。もちろん、DBA、DAが解るはずがない。

情報化社会とは、情報を大切にする社会のことである。ここで言う、情報化と情報とは意味が違う。人が言うから、言う程度の扱いをしたらいいというものではない。

情報を扱う、その結果が、情報社会なのである。情報社会という社会が存在するのではない。社会の状態がどうであれ、存在するものである。

コンピュータがなければ情報社会は存在しないというものでもない。コンピュータがあろうがなかろうが情報社会は存在する。情報社会の有り様が違うだけである。

ちなみに、コンピュータがなければ、データベースは悲惨なものになる。存在し得ないし、形も作れない。簡単に出来そうに見えて、出来ない。

## 必須人材の欠落

アナログでは、データベースの構築は出来ないわけではないが、制作は至難の業である。しかし出来なければ、構築しなくてもいいというものでもない。こうして苦勞して、作る。苦勞の程度に合わせたものが出来る。

デジタルとは、そういうもののひとつである。情報をよく考えないから、デジタルにすれば、すべて解決すると思う。

そういう人は、デジタルにしたら、まき起こる問題がある、ということに気付かない。気付かないからまき起こった問題に手をこまねくことになる。そして嘆く。今もそういう人はたくさんいる。

デジタル庁が発足した。

目出度いが、初代担当大臣は任期一年で変わった。この閣僚人事から筆者は、首相はデジタルの意味が分かっていない、と判断した。

たとえ分かった振りをしている、としてもだ。分かっていたら、こんなことはしない。デジタル化するには、そこそこ形が目鼻がつくまで担当は変えてはいけない。

緊急事態における応急対策のワクチンとは違うのだ。こんなことをしているようでは、かつてのeジャパン構想の二の舞である。

社内システム部門を外注化するが如く、余人を以って替えやすしデジタル庁長官の下では、とてもではないが落ち着いた情報処理構想など編み出すことは不可能だ。

まさに、身分（存在価値）保証の担保されない情報システム部門の社外化と通じるものがある。情報処理を健全にするためのデータ定義付け、それを担うDA（Data Administrator）、およびそれに基づいたデータベース構築を担うDBA（DataBase Administrator）の必須人材ですら、我国には国家レベルにおいても存在し得ない状況が見て取れる。

（ FumioTAHARA ）